

研究資料 黒田清輝宛、杉竹二郎宛 山本芳翠書簡について

著者	椎野 晃史
雑誌名	美術研究
号	423
ページ	95-97
発行年	2018-01-11
URL	http://doi.org/10.18953/00008492

研究資料

黒田清輝宛、杉竹二郎宛 山本芳翠書簡について

椎野 晃史

書簡の概要

東京文化財研究所には、山本芳翠が黒田清輝に宛てた十三通の書簡、そして黒田や久米桂一郎と交流を持った杉竹二郎宛の書簡一通が保管されている。封書は十一通で、そのうち七通は明治二十八（一八九五）年の消印を持ち、その他三十五（一九〇二）年が一通、そして三通が投函年不詳である。葉書は三通で、明治三十三年、三十五年、三十六年の年賀状からなる。注目すべきは明治二十八年に投函された書簡群であり、日清戦争の従軍から帰朝した直後の芳翠の動向について、従来の芳翠研究を補完する内容を持つ。また黒田側からしても、明治二十八年は現在公開されている書簡や日記の数に限りがあり、本書簡の存在はその間の動向を示唆する点においても貴重である。さらに書簡では裸体画論争の火種となった「朝妝」について触れるなど、当時の洋画壇をめぐる問題についても言及しており、その有用性は黒田・芳翠に限らず、時代の一断面を伝える書簡としても注視すべき内容を持つ。

まずは先行研究を参考に黒田と芳翠の関係について確認しておこう。

黒田と芳翠

黒田と芳翠の出会いのは明治十七（一八八四）年八月のパリに遡る。黒田自身の回想によれば「芳翠氏とは公使館などでチラホラ顔を合せる許り年の上からも大分相違があり先づ交際などはしなかつた⁽¹⁾」らしい。確かに芳翠は黒田の十六歳年上であり、立場も子爵の養子であり法律を学びに渡仏した黒田と、もともと西洋絵画を学ぶために海を渡った芳翠とは大きくかけ離れていた。その後黒田は、母に宛てた明

治十七年八月二十八日付書簡で、芳翠宅を訪れ日本料理を食べたことを書き記しており、以降『黒田日記』にはたびたび芳翠の名前が登場するようになる。また広く知られているように、芳翠は藤雅三や林忠正とともに黒田を画家の道に導いた一人であり、和田英作に対して「日本に黒田という画家を拵えたのは乃公だ⁽²⁾」と口癖のように語っていたという。そして「今に黒田が帰つて来る。さうしたら日本の洋画も本物になるであらう⁽³⁾」と黒田を高く評価している。芳翠は西洋絵画の模写を日本に持ち込もうと奔走し、あるいは画塾の経営を通して後進の育成にも尽力するなど、当時冷遇されていた洋画の普及に腐心しているものの、黒田が帰国すると画塾・生巧館を塾生とともに黒田に譲り渡している。

明治二十九（一八九六）年五月二十二日、白馬会の結成時には芳翠の画室に黒田や久米桂一郎等いわゆる新派の画家が集まり、明治美術会から出て新しい倶楽部の結成について相談をしている。このように、芳翠は黒田ら次世代を担う画家の良き相談相手であった。しかしながら明治三十五年九月二日付の書簡が伝えているように、芳翠自身は白馬会の運営に積極的に関わることはなく、第七回白馬会に懇意の仲であった伊藤博文を描いた肖像画を出品しているが、その他出品歴は少ない。白馬会結成以後は黒田が回想しているように「最もお互ひに用が多いので平生は餘り出會ふ事もなかつたが牛どん會には一月に一回二ヶ月に一回必ず参會したものだ⁽⁴⁾」とあり、交流の頻度は減少したものの、晩年まで続いていた様子がうかがえる。そして明治三十九年に脳出血により芳翠が亡くなった後も、黒田の日記には芳翠の命日に、芳翠が眠る泉岳寺へ墓参りに訪れている様子が記されている。黒田と芳翠は十六歳離れていながらも強い絆で結ばれていたことが知られるのである。

以上のように従来から黒田と芳翠の関係は広く知られてきたが、意外にも二人の間で交わされた書簡はあまり知られていない⁽⁵⁾。そのなかで本書簡は芳翠が黒田のことを「禿頭先生」と記すなど、両者の親密な関係を伝えているが、一方で文面からは、芳翠から黒田に対して積極的に連絡をとろうとする姿勢が読み取れる。京都に滞在している黒田に対して東京の出来事を逐一報告し、また黒田の制作状況を尋ね、あるいは文末に結婚したばかりの黒田の妻へあいさつを欠かさず記すなど、公私にわたり黒田を気にかける芳翠の姿が認められる。芳翠は酔うと黒田に「僕は君を畫

工に推薦して君に氣の毒な事をした畫工ほど貧乏なものはない⁽⁶⁾と語りかけていたといい、黒田に画家の道を薦めた責任を芳翠が少なからず感じていたことは確かであろう。一方で洋画の未来を黒田に託したあとは、潔く自身の画塾・生巧館を手放し、裸体画問題の際には五月三日付書簡に見られるように新聞紙面で援護射撃を企てるなど、後方支援に徹している感がある。ここには近代洋画の発展において自身の中継ぎ的な立ち位置にしていることを理解し、社会の動向を先見して客観的な判断を下す芳翠像が看取され、時代の転換期に生きた一人の洋画家の実像が見出せるかもしれない。

次に書簡の内容から、当時芳翠が置かれていた状況を概観しておこう。

明治二十八年前後の芳翠

芳翠は明治二十七（一八九四）年に宮内省の内命を受けて日清戦争に従軍し、明治二十八年を異国の地で迎えている。従軍画家として戦地を巡った芳翠は、本稿で紹介する同年四月五日付黒田宛書簡を通じて初めて明らかになったように、三月下旬に帰国の途についた。芳翠はこの年の八月十五日に父・山本権八を亡くし、十五歳で家を出てからおよそ三十年ぶりに生家がある岐阜の明智町に帰郷している。

この年には芳翠の画業において特筆すべきいくつかの作品がある。芳翠は十月に開催された第七回明治美術会に、画家の代表作として知られる「浦島図」（岐阜県美術館蔵）を出品している。洋画の優位性を示すために描かれ、日本の昔話に取材しながらも西洋における凱旋図の図像を引く本作は、この時期の洋画を代表する作品として位置づけられている。

もうひとつは従軍の成果として宮中に納められた「明治二十七八年戦地記録図」（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）である。本作は全十五図からなり、「日清戦役花園口上陸の図」や「日清戦役金州城」など、日清戦争の戦況や現地の様子をそれぞれ描いている。各場面は金砂子で画面上下を縁取り、そのフレームのなかでプロットが展開し、まるで段落式の絵巻を彷彿させる特異な構成をもつ。これまで本作の正確な制作年や宮中に納められた経緯など、その制作背景は不明であったが、今回紹介する書簡のうち五月三日、十四日、六月一日では本作に関わる記述と思しき箇所があり、

断片的にその制作背景を伝えている。詳しくは各書簡の翻刻・解題を参照されたいが、その制作は帰京した直後に行われ、そして当初より献納を想定した制作であったことが記されている。このことは芳翠の従軍そのものが明治天皇の内命であったことを改めて示し、皇室と芳翠の密接な関係性を伝える。

芳翠は明治二十（一八八七）年代初頭に制作された「九州・琉球巡視記録画連作」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）から、亡くなる年に描いた「唐下屯月下歩哨図」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）に至るまで、多くの作品を献納している。黒田は芳翠について「殊にお上に對しては大變な尊敬心を持つて居つた、國民としては殊に其度の發達して人で自分のは同じ宗教でも天皇教を立てやうと云つて居られた⁽⁷⁾」と述べ、日常生活でも家族や生巧館の塾生にも御所に向かつて毎朝挨拶をさせることを強要していたという。また芳翠は自宅の門に「宮内省御用畫師」の看板を掲げて居た⁽⁸⁾といふ、芳翠にとって宮内省の御用は特別な意味を持っていたことを伝える。そして「明治二十七八年戦地記録図」に話を戻すならば、芳翠の三女・辰子は母から父・芳翠の出世の証として「何日も御物の寫眞（日清戦役畫）を見せられて誡められて居つた⁽⁹⁾」という。

本作は明治期の戦争記録画を考える上で重要作であると同時に、御物として伝わった来歴は皇室と洋画家との関係を考える上で興味深い⁽¹⁰⁾。詳細な検討は今後の課題とするが、芳翠という近代洋画の黎明期を生きた画家の実像として、「皇室」とその「御用」の意味の大きさは改めて認識されてよいのではないだろうか。

さて芳翠という画家の実像を捉える上で明治二十八年五月九日付、あるいは年不詳十一月九日付書簡など、折に触れて貧乏であることを自虐的に記している点について注意を払う必要がある。芳翠家の困窮については、黒田や門人の回想によつて繰り返し伝えられているが、黒田は「日本」掲載の「山本芳翠氏の逸話」の中に「一生貧乏」という項を立て、「君は幾人かの書生を養つた事はあつたが別に教員にもならず従つて月給を貰つて暮した事もなく始終困難な世を渡り兎に角大勢の家族を維持する傍ら自分の好み畫風をやつて居つたなどは實に賞嘆すべき事で其の後畫稿の多いには驚いた⁽¹¹⁾」と述べ、続けて「之れ丈け繪畫界に功勞ある人だから、外國なら最少し政府で優遇もしたらうが日本では仕方がない、一生貧乏で終られたは氣の

毒な次第である⁽¹²⁾」と伝えている。また弟子の北蓮藏は「帰朝後は明治美術会や、白馬会などもあったが、余り展覧会などには出品せぬ人でした。勿論その理由は生活のための絵を描かなければならなかったからでしょう。その絵は主に肖像画で多忙を極めておりました。画料も安く、当時は多分三十号の油絵で三百円位だろうと思います⁽¹³⁾」と回想している。確かに芳翠は定職には就かず夫人と六人の子どもを養っており、北が言及するように生計を立てるための制作が中心となり、展覧会への出品作が減少した可能性も想定しておくべきだろう⁽¹⁴⁾。

以上、明治二十八年を中心に書簡を通じて芳翠の実像について読み解いてきた。公私にわたり画家の身辺は慌ただしいが、充実した制作活動を展開しており、画業を検討する上でも重要な時期にあたる。さらにこの年には黒田の裸体画論争、また第七回明治美術会における新派と旧派の対立など、近代洋画史においても転換期にあたり、この年に両者の間で交わされた書簡は重要な意味を持つ。特に芳翠の動向を詳しく伝える資料として、芳翠研究に大きく寄与することが期待され、日清戦争の帰国時期とその足取り、「明治二十七八年戦地記録図」の制作時期など、明治十八年の芳翠についてこれまでの経歴に新たな事項が加えられた。一方で黒田との実質的な交流の様子を伝え、さらに芳翠を取り巻く環境とその立ち位置について画家のイメージを補完している。このように本書簡は芳翠という画家の実像に迫る内容を持つ書簡であり、美術史上の意義は大きいと考える。

註

- (1) 黒田清輝（談）「山本芳翠氏の逸事」『日本』一九〇六年十一月十九日。
- (2) 和田英作（談）「洋画界の恩人」『報知新聞』一九〇六年十一月十九日。
- (3) 長尾一平編『山本芳翠』長尾一平、一九四〇年。
- (4) 黒田清輝（談）「山本芳翠氏の逸話（中）」『日本』一九〇六年十一月二十日。
- (5) たとえば黒田から芳翠に宛てられた明治二十六年の書簡の影印と翻刻が、長尾一平編集の『山本芳翠』に掲載されている。両者の間で交わされた書簡の所在については今後の研究が俟たれる。
- (6) 前掲註4。
- (7) 黒田清輝（談）「山本芳翠氏の逸話（下）」『日本』一九〇六年十一月二十二日。

黒田清輝宛、杉竹二郎宛 山本芳翠書簡について

- (8) 春蘭道人、秋菊道人編『当世画家評判記』文禄堂、一九〇三年三月
- (9) 前掲註3。
- (10) 大熊敏之「明治期の洋風記録絵画」（『明治美術再見IV 記録の芸術 山本芳翠とその時代』宮内庁三の丸尚蔵館、二〇〇一年）、塩谷純「日本近代美術に見る御用と栄誉―帝室技芸員制度とその周辺」（『天皇の美術史6 近代皇室イメージの創出 明治・大正時代』吉川弘文館、二〇一七年七月）。
- (11) 前掲註4。
- (12) 前掲註7。
- (13) 北蓮藏（談）「芳翠先生追憶」『美術通信』一九三九年六月十八日。
- (14) 古川秀昭氏は『画集・山本芳翠の世界』（郷土出版社、一九九一年）の解説において、芳翠が肖像画を多く手掛けた理由として、生活のためではなく洋画の普及を志した結果とする見解を示している。本稿では氏の指摘を踏まえた上で、書簡の内容から画家の実像として当時困窮していた状況を指摘しておく。

（付記） ご助言ご教示を賜りました久米美術館伊藤史湖氏に厚く御礼申し上げます。

（しいの あきふみ・福井県立美術館学芸員）